

新たな決意に胸踊らせて

岩手県台湾同郷会会長・本会会員

南郷 成民

第一日 四月二十五日(木)

去る四月二十五日から二十九日までの四泊五日の日程で挙行された第三十
一回日本李登輝学校台湾研修団（略称・李登輝学校研修団）に、念願叶って初めて参加させていただきました。

私は台北出身の両親のもと、日本で生まれ育った台湾人二世。五十年前、小学校六年生の時に日本国籍となりましたが、両親の故郷で、素晴らしい先生方の講義に学び、先人の足跡を訪ねながら、自らの過去・現在・未来に思いを馳せた五日間でした。

今回は坂本吉勝団長、高橋顕副団長のもと、二十四名の参加者とのことで

したが、団員の皆様の年齢層が想像以上に幅広く、どうやら私がほぼ全団員の真ん中くらいの年齢であるらしいことがわかり、初参加の緊張がほぐれて行くのを感じました。

第一講は市川春樹先生の「台湾ことばの栞」。私にとつての台湾語は、耳に懐かしい響きでありながら、私自身は話せないという複雑な思いを抱いています。市川先生は台湾語で博士論文を書き上げた強者だそうで、従来意識することなく使ってきた「台湾語」という呼び方も、現在では「台語」ないし「ホロー語」という呼び方になってきたとのこと。日本のように均一性の極めて高い国というのはむしろ稀

で、人口が日本の五分の一ほどの台湾でさえ、様々な族群（エスニックグループ）が共存し、それによって実に多様な言語や文化が展開されている多元社会であるとお話から、言語の学習を通じて台湾社会をより深く理解していきたいとの思いになりました。

第二講は王康厚先生の「台湾独立運動と黄昭堂主席」。黄昭堂主席の歩まれた道としてお人柄をわかりやすくお話し下さり、後半の野外研修での黄昭堂記念公園訪問への期待が高まりました。また、来年の総統選挙について、この選挙は台湾が日米の方向に向かうのか、中国の方向に向かうのかという実にシンプルな問題だと喝破され、中

国にすり寄ってもチベット、ウイグル、香港と同じ運命をたどるのみだとの指摘に全団員が頷いておりました。

初日の研修はこの二講で終わり、晩餐会が始まると皆一挙に打ち解けて、同じ志で集う「学友」のありがたさを実感しました。私は幸運にも市川春樹先生の隣席となり、様々なお話をより深く伺いすることができたことは本当にありがたいことでした。

第二日 四月二十六日(金)

第三講は蔡焜霖先生による「台湾の白色テロと経済発展」。蔡先生は蔡焜燦先生の実弟で、地元の町役場に就職したばかりの一九四九年九月、高校二

年生のときに読書会に参加したというだけの理由で逮捕され、十年間の獄中生活は正に生き地獄だったと語る口ぶりは淡々とされていきました。

しかし、それだけに一層、想像を絶するそのご体験に胸が押しつぶされるような苦しさを感じ、そして憤りがこみ上げてきました。

第四講は産経新聞台北支局長の田中靖人先生による「台湾報道の行間を読む」。台湾に関する報道を中国大使館が常時監視し、文言一つにも厳しいクレームが入り、中国総局の記者へのビザ発給停止等の脅しまでかけてくるという実態を知らされ、中国のえげつなさに唖然とさせられたものです。

支局長一名という体制では独自取材に限界があり、台湾メディアの記事も参考にせざるを得ない中で、台湾メディアが余りにも政治色が強く、公平公正な報道が少ないこと、誤報が多すぎる等、報道現場のご苦労がしのべれました。

昼食後の第五講は張文芳先生による「台湾語になった日本語」。満九十歳という年齢を感じさせないエネルギーもユなご講義。パワーポイントの資料もご自身で作成し駆使されるその飽くなき向上心に驚かされ、その姿勢をぜひ見習わせて頂こうと思いました。

第六講は沼田幹夫大使（交流協会台北事務所代表）による「日台関係の現



田中靖人先生 (4月26日)



張文芳先生 (4月26日)



沼田幹夫先生 (4月26日)



熱心に講義に耳を傾ける参加者

状及び今後の展望」。お立場上、慎重に言葉を選んでご講義くださいました。が、「台湾が台湾であり続けてくれることが最も大事なこと」とのお言葉に「我が意を得たり」の思いでした。

先日の中国軍機の「越境」はわずかな分だけだったとは言え、十分あれば台湾の主要軍事施設を破壊できる、とのお話には鳥肌の立つ思いでした。

来年の総統選については「縁でも青でもどちらが来ようとも、結果を出せる状態に持って行く。そのための人脈作りに注力している」とのお言葉を頼もしく思いました。最後に、次世代通信の5Gを巡る覇権争いについて、何れにしても5Gを制する国にあらゆる情報を管理されてしまうのだが、それによる不利益、危険が少ないのは中国ではなくアメリカであり、我が国としてはアメリカ側につくのだ、というお話を至極当然と受けとめつつも、日本がその5Gを制することができない現状は余りにも悲しいものであります。

いよいよ最終の第七講は李登輝校長のご講義の予定でしたが、李校長はご体調すぐれず、お出ましいただくことは叶いませんでした。結局、第七講は李校長がこの日のために用意された原稿を秘書の早川友久さんが代読。さらに、早川さんご自身の原稿による「李登輝はなぜ日本人を惹きつけるのか」とのご講演となりました。

李校長の「アジア情勢の大きな変化に直面する日本はアメリカに頼ることなく、日本自身が大きく変化する必要がある」「日台の地政学的な戦略もまた、いかに実現させていくかの変化が求められている。具体的には、経済や文化交流のみならず、科学技術分野や軍事面における交流と協力関係の構築が重要とされてくる」といった珠玉のお言葉は、宝物として心の奥にしまい込むのではなく、常に目にし、口に出し、実践して校長のご期待に副いたいたいものと思います（本誌4頁参照）。

早川さんのお話では、李登輝校長が

育った家庭は家でも日本語で話されていたとのことで、校長にとって母語は日本語であり、思考する言語も日本語であるというエピソードが印象的でした。また、台湾が民主化に成功したのは、権力を「私」ではなく「公」のために使うべきだという日本教育のお陰であるという校長の感懐に、日本人として襟を正される思いがしました。

第三日 四月二十七日(金)

研修後半は台南での野外研修。嘉義駅で台南の大学（中信金融管理学院）で教鞭をとられている梅原克彦・常務理事が合流され、三日間の野外研修が一層深みのあるものになりました。

最初の訪問地は烏山頭ダム。修復された八田與一さんの銅像の前で記念写真を撮り、諸施設を見学。記念館や旧住宅を参観して改めて八田技師の事績の偉大さ、そしてそれが九十年を経た現在も台湾の人々に豊かな実りを与え続けていることに深い感銘を覚えまし

た。台南の宿は飛虎將軍廟運営委員をつとめる郭秋燕女士の日升大飯店。

第四日 四月二十八日(土)

この日は台湾独立運動に生涯を捧げた王育徳先生おういくとくと黄昭堂先生わうせうたうの事績を訪ねる日。昨年九月に開館した「王育徳紀念館」は想像より小さな建物でしたが、展示は充実しており、館員の周育

如さんの説明に加え、杉本さんと早川さんからあまり知られていないエピソードをお聞きし、一時間半の参観時間があつという間でした。これからも訪れたいと思います(本誌16頁参照)。次は台湾の人々の活力を肌で感じる台南市場でした。買ってすぐその場で



市川春樹さんと周育如さん(王育徳紀念館、4月28日)



台南市場(4月28日)



黄昭堂紀念公園(4月28日)



飛虎將軍廟(4月29日)

食べたマンゴーのおいしかったこと。

昼食後に訪れた「黄昭堂紀念公園」には資料展示がなく、黄主席の銅像があるだけでしたが、その存在感の大きさに包まれる幸せなひとときでした。

そのほか、台湾最大と言われる媽祖廟や、かつての製塩業の様子を今に伝える塩田等を参観してこの日の研修は終わりました。

第五日 四月二十九日(日)

研修最終日は、まず飛虎將軍廟にお参り。郭秋燕さんが詳しく説明して下さい、恒例の「君が代」「海行かば」を歌ったのですが、朗々と高らかに響く歌声はさすが李登輝学校、実に気分の

よいものでした。その後、飛虎將軍の御神輿がある朝皇宮に参拝しました。

今回の訪問地すべてがまた訪れたい場所ばかり。スタッフの皆様のご尽力に心から感謝して五日間の研修を終えることができました。ぜひまた参加したいと思います。

最後に今回の研修に参加した結果、二年後、満六十五歳になったなら、父が創業した会社の仕事を二人の息子に完全に任せ、一年間、台湾に語学留学をすることを決意しました。家族にその思いを伝えたところ、誰一人として反対する者なく、私の「日本と台湾の架け橋になる」という人生最大のテーマは新しいステージを迎えます。